

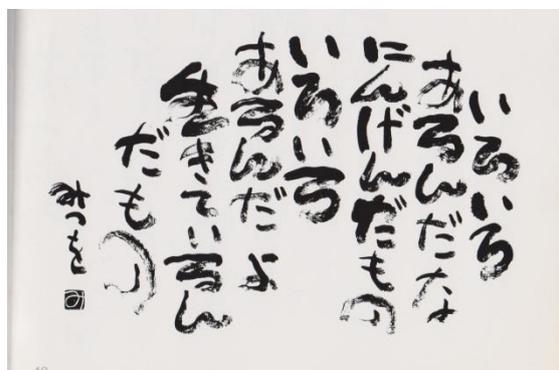
お経に親しむ

やすらぎ寺子屋第二十八回 平成二十五年八月四日

修証義④ 第三節 命の儂さ・行為の確かさ

むじょうたの がた し ろめい みち くさ お みすで
 無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身已に
 わたくし あら いのち こういん うつ しほら とど がた こうがん
 私に非ず、命は光陰に移されて暫くも停め難し、紅顔いず
 くへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし、熟観ずる所に
 おうじ ふたたび おう おお むじょうたちま いた
 往事の再び逢うべからざる多し、無常忽ちに到るときは
 こくおうだいじんしんじゅつじゅうぼくさいしちんぼう な ただひと こうせん おもむ
 国王大臣親暉従僕妻子珍宝たすくる無し、唯独り黄泉に趣
 くのみなり、己れに随い行くは只是れ善悪業等のみなり。

光陰…光は昼間、陰は夜間。
 過ぎ行く時間・月日の意
 (光陰矢の如く)
 紅顔…活き活きとした若者の顔
 黄泉…よみのくに あの時 冥土
 ※四人の妻の喩え



現代語訳
 無常の命は頼りとはならない、露のごとき命は、どのような道の草に落ちて、一生を終えるかは誰にも分からない。この身は自分の思い通りにはならず命は過ぎゆく時間の中で、わずかな時間であっても留めることは難しい。若しい少年時代の顔容はどこかに去り、面影を探しても跡形も無い。じっくりと観察したところで、過ぎ去った時間に再び逢うことが出来ないことが多い。無常が突然に来るときには、国王も大臣も親族も従者も妻子も素晴らしき財宝も誰も助けてはくれない。ただ孤独に黄泉にいくのみである。その時、我が身に従うのは、生前になした善悪の行いのみである。

命は儂い。確かなのは行為のみ。
 無常の命を体当たりで感(観)じる

誠にそれ無常を観ずる時、
 吾我の心生ぜず、名利の念起こらず。
 時光の太だ速かなることを恐怖す、
 所以行道は頭燃を救う。
 『学道用心集』「菩提心を発すべき事」章